

春江一也

kazuya harue

プラハの春

P R A H A

CESTÉ STŘEŠTÍ
SLOVENSKO

Kde jsou
Duhček,
Cerník
a Smrkovský?

KDE JSOU
DUBČEK,
ČERNÍK
A SMRKOVSKÝ?

Kde jsou Duhček, Cerník a Smrkovský?
Kde jsou Duhček, Cerník a Smrkovský?
Kde jsou Duhček, Cerník a Smrkovský?

Kde jsou Duhček, Cerník a Smrkovský?
Kde jsou Duhček, Cerník a Smrkovský?
Kde jsou Duhček, Cerník a Smrkovský?

春江一也

kazuya harue

プラハの春

苏工业学院图书馆

PR A H A

藏书章

プラハの春

1997年5月31日 第一刷発行

1997年6月18日 第二刷発行

著者 春江一也

発行人 山本大介

発行所 株式会社集英社

〒101-50 東京都千代田区一ツ橋2-5-10
電話 編集部 (03) 3230-6058
販売部 (03) 3230-6393
制作部 (03) 3230-6080

印刷所 中央精版印刷株式会社
株式会社美松堂

製本所 中央精版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本がありましたら小社制作部宛てにお送りください。

送料は小社負担でお取り替えいたします。

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、
法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

© 1997 ASC, INC Printed in Japan
ISBN4-08-780245-0 C0093

プラハの春

目次

プロローグ

11

第1章 ブルタバの流れ

23

第2章 反体制活動家

85

第3章 暗い影

131

第4章 悲愁

179

第5章 プラハの春

217

第6章 『ミレナとワインを』

273

第7章 ワルシヤワ書簡

351

第8章 その前夜

405

第9章 軍事介入

439

第10章 祈り

481

エピローグ

527

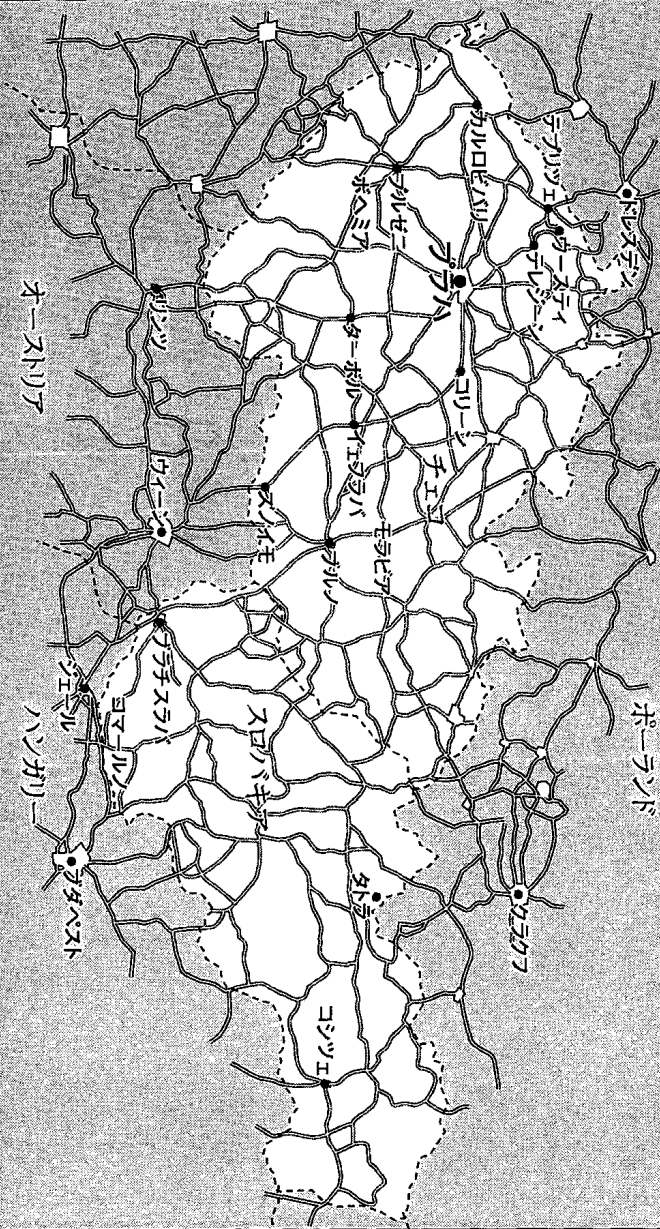
DDR(東独)

ポーランド

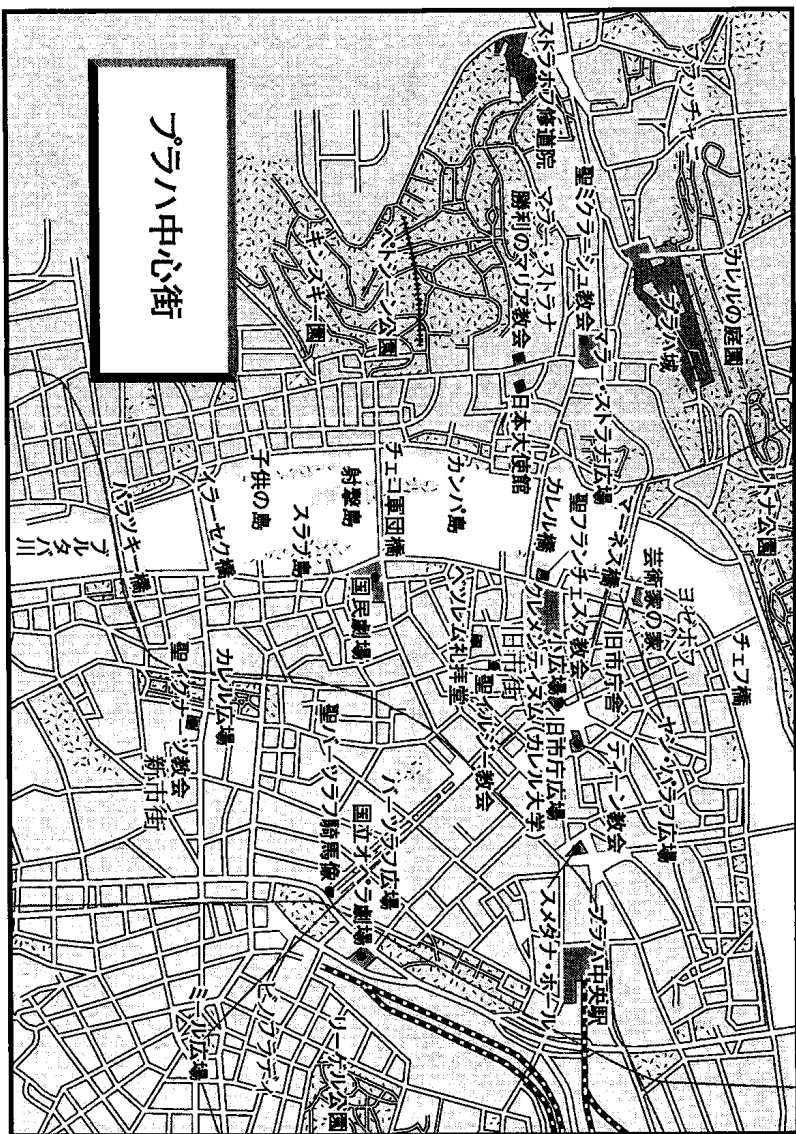
オーストリア

ハンガリー

0 50 100km



プラハ中心街



主要登場人物

- カテリーナ・グレーベ……カレル大学ドイツ語講師。元ドイツ社会主義統一党（SED）党員。DDR市民にして反体制活動家
- 堀江亮介……在チェコスロバキア日本大使館・二等書記官
- シルビア……カテリーナの一人娘
- ハインリッヒ・シュテンツェル……カレル大学講師、言語学者
- 稲村嘉弘……亮介の同僚、大使館二等書記官
- ヤン・パラフ……カレル大学文学部学生
- モニカ……同女子学生
- マイヤー公使……在ブラハDDR大使館次席、実は治安機関『シタージ』の出先責任者
- シュナイダー局長……カテリーナと離別した夫、『シタージ』の局長
- ペーナー次官……DDR国家治安省『シタージ』の最高幹部
- ヘス中佐……DDR秘密特務機関要員
- ペリカン……ブラハ国宮放送総裁
- ドゥプチェク……チェコスロバキア共産党第一書記、「ブラハの春」改革運動を指導
- スボダ……同大統領
- ブレジネフ……ソ連共産党書記長
- フサーク……ソ連に協力した保守派共産党員。ドゥプチェクを追放して党第一書記となり改革運動を弾圧した

一九六八年、『アラハの春』から八月にかけて、忘れ得ない日々をともしたチェコスロバキアの人々を追憶し、また人生の苦境と試練のとき励ましてくださった多くの方々に感謝し、そしてE・Gに捧げる。

プ
ラ
ハ
の
春

プロローグ

桜の季節が過ぎてまもない、暖かい夕暮れだった。都内永田町の総理大臣官邸正門に、黒塗りの乗用車が次々と吸い込まれるように到着していた。

一九九二年（平成四年）四月二十四日夕刻のことである。車から降り立つ人々は、国賓として日本を訪れていたハベル・チェコスロバキア共和国大統領夫妻のため、宮澤首相夫妻が催す公式晩餐会に招待された客だった。その招待客のひとり、堀江亮介は、平河町の事務所から歩いて総理大臣官邸に向かった。亮介は民間の国際交流活動を支援する団体に、外務省から派遣され部長職にあった。いつでも職員三十人ほどの小さな公益法人で自家用車などなくハイヤーを用意する身分でもなかった。それに官邸まで歩いて十分とかならない距離でもあったのだ。

十日ほど前、堀江亮介は、毛筆で宛名が書かれたハベル大統領歓迎晩餐会への招待状を受け取った。突然だった。差出人は内閣総理大臣宮澤喜一とその夫人。亮介はげげんに思った。招待される理由がよくわからなかったからだ。派遣されていた団体で、亮介はチェコスロバキアにかかわる仕事をしていなかった。

昔、チェコスロバキアの首都ブラハの日本大使館に在勤し、帰国後、本省欧亜局東欧第二課に配置されチェコスロバキアを担当したことはあった。それはもう二十年以上も昔、世界は東西に二分され米国とソ連を軸に対立していた冷戦の緊張がふと緩み、冷たい北風がかすかな春風とせめぎ合っていた微妙な時代のことであった。

晩餐会に招待されたのは、外務省が所管する団体を代表する職員ということで、たまたま順番だったであろう。亮介はそう考えた。

招待状に平服とあつたのが幸いだった。ずっと昔、西ベルリンで買って大事にしていたモヘヤの紺のスーツ、この日のために高島屋で特別に誂あつえた仕立ておろしの白いワイシャツ、クリスマスチャン・デイオールネクタイ。精一杯のおしやれをしたつもりだった。だが、身に着けているもののうち一つだけ、晩餐会にふさわしいものがあつた。プラハで贈り物にもらったモーゼル・ガラス製のカフスボタンだ。

一九六七年四月、ちょうど二十五年前になる。このカフスボタンを贈り物にもらうきっかけとなつためぐり逢い。かかわりの不思議と思ひもかけない展開だった……。あの日々の記憶は薄らぐどころか、思ひ出すたびに、生々しくよみがえつた。

気がつくと、亮介は自民党本部の前を通り過ぎていた。参議院議員会館の角を右折し、国会議事堂裏の広い通りに出た。道路の両側に続く街路灯のポールに、赤、白、青三色のチェコスロバキア国旗と日の丸がはためている。国賓を迎える儀礼なのだ。総理大臣官邸のすぐ近くまで来ていた。夕暮れの青い空に霞がかかっているように見えた。

亮介は総理大臣官邸の大広間に立っていた。手にしたアペリティブのグラスがなじまず落ち着かなかった。談笑する人々で賑やかだ。何人かの元首相、閣僚、国会議員、財界人、学者、ジャーナリスト、音楽家、スポーツ関係者など、テレビや新聞、雑誌でよく見かける顔ぶれがほとんどであった。気後れしたわけではない。しかし、場違いなところへ迷い込んだ当惑が亮介をぎこちなくしていた。

「やあ、堀江君、しばらくだね。元氣？」